

序

榑田川は都から伊勢神宮へ向かう際には必ず渡ることになる川のひとつです。中世の伝承を伝える『倭姫命世記』には、この地で倭姫が榑を落とされたことが榑田の名の由来として記されています。この地に暮らす人々は、齋王などの貴人が往来する様子を目にすることで、このような伝説を育んできたのかも知れません。

今回、一般国道42号松阪・多気バイパスに伴う地下道の建設が計画され、これに先立って廿子遺跡の発掘調査を行いました。調査の結果、古墳時代と平安時代の建物跡を複数、確認することができました。

廿子遺跡に暮らした人々は、往来する貴人たちを眺めながら噂に聞く遠い都に想いを馳せていたのでしょうか。

廿子遺跡の今回の調査区は地下道建設により姿を消しますが、この発掘調査の成果が豊かで厚みのある地域史把握のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所、松阪市教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元上川町にお住まいの方々からご理解とご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水 康夫

例 言

- 1 本書は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する廿チ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査にかかる費用は国土交通省中部地方整備局が負担した。
- 3 本書に掲載した遺跡の概要については、既当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告VI 山ノ花・廿チ・北上遺跡』、『一般国道42号松阪多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』9・11等で公開しているが、本書をもって正式報告とする。
- 4 発掘調査及び報告書作成業務は、下記の体制により実施した。
調査主体：三重県教育委員会
調査担当：三重県埋蔵文化財センター
【平成16年度】範囲確認調査
所長 吉水康夫
調査研究IIグループ GL 泉 雄二（総括）
主幹 五嶋史住 主事 大村伸一 臨時技術補助員 瀬野亮知世
総務グループ 主事 金森 功（経理担当）
【平成18年度】現地調査・整理作業
所長 吉水康夫
調査研究II課 課長 田村陽一（総括） 主査 木野本和之（調整） 主事 西口剛司
支援研究課 研修員 勝山孝文
総務課 主事 金森 功（経理担当）
整理担当：情報普及課・支援研究課 作業受託：東海アナース株式会社
【平成19年度】報告書作成
所長 吉水康夫
調査研究II課 課長 田村陽一（総括） 主幹 木野本和之（調整） 主事 西口剛司
主事 勝山孝文
総務課 主事 金森 功（経理担当）
- 5 本書の執筆（第I章～第IV章、第VI章）と編集は勝山が行い、木野本が補佐した。
- 6 出土柱根の樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託し、その結果を第V章に掲載した。
- 7 本書に掲載した遺構写真の撮影は西口・勝山が行い、遺物写真の撮影は勝山が行った。
- 8 本書に用いた地図類は国土地理院発行の1/25,000地形図、松阪市1/2,500都市計画図である。なおこれらは国土調査法の日本測地系による座標第VI系（旧国土座標）で表現されているため、平成14年から施行されている日本測地系2000及び測地成果2000には対応していない。したがって本書掲載の遺構実測図も同様である。
また、挿図の方位はすべて座標北で示した。なお当地の磁針方位は西偏6°40'、真北方位は西偏0°17'34'（平成10年）である。
- 9 本書で使用した土色・胎土の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（19版1997年）による。
- 10 本書で報告する遺構は見た目の性格により凡そ下記の略記号を付与した。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SZ：性格不明遺構 Pit：小穴・柱穴
- 11 本書で報告した図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 前言	(勝山)	1
1 松阪多気バイパスの概要		
2 発掘調査に至る経過		
3 調査方法		
4 発掘調査経過		
II 位置と歴史的環境	(勝山)	7
III 遺構	(勝山)	9
1 弥生時代末期の遺構		
2 古墳時代後期末の遺構		
3 平安時代後期の遺構		
4 時期不明の遺構		
IV 遺物	(勝山)	17
1 古墳時代後期末の遺構出土遺物		
2 平安時代後期の遺構出土遺物		
3 包含層出土遺物		
V 甘ち遺跡出土柱根の樹種同定	(パレオ・ラボ)	21
1 はじめに		
2 試料と方法		
3 結果		
4 考察		
VI 結語	(勝山)	23
1 遺構の変遷について		
2 小字名「甘ち」と飯高郡条里の坪並について		
3 棟方向と条里方向の関係について		
報告書抄録		39

挿 図 目 次

第1図	路線・工区・遺跡位置図（1：50,000）	2
第2図	廿チ遺跡周辺の地形図・調査区位置図（1：5,000）	6
第3図	遺跡位置図（1：25,000）	8
第4図	廿チ遺跡調査区位置図（1：2,500）・平面図（1：200）・土層断面図（1：100）	10
第5図	古墳時代後期末 掘立柱建物 S B 30・34・38・39（1：100）	12
第6図	平安時代後期 掘立柱建物① S B 31・32・33・36・37（1：100）	14
第7図	平安時代後期 掘立柱建物② S B 35・40（1：100）	15
第8図	廿チ遺跡出土遺物（1：4）	19
第9図	廿チ遺跡出土柱根材組織の光学顕微鏡写真	22
第10図	廿チ遺跡（第1次）遺構平面図（1：300）	24
第11図	遺構変遷図	25
第12図	廿チ遺跡周辺坪並復元図	26

挿 表 目 次

第1表	発掘調査遺跡一覧表	3
第2表	発掘調査経過表	4
第3表	掘立柱建物一覧表	15
第4表	土坑一覧表	15
第5表	溝一覧表	15
第6表	遺物観察表	16
第7表	廿チ遺跡出土柱根の樹種同定結果一覧	17

図 版 目 次

表紙	発掘調査終了後の廿チ遺跡 北上空から	27
図版1	調査前全景 東から／工事完成後全景 東から	29
図版2	表土掘削 西から／作業風景 東から	30
図版3	S D 23 検出作業 北から／S B 30 柱穴検出状況 北から	31
図版4	調査区全景 東から／掘立柱建物 S B 30 東から	32
図版5	柱穴検出状況 真上から／掘立柱建物（S B 30～36）集中部 東から	33
図版6	溝 S D 1・16・22・23 南から／溝 S D 23と南壁土層	34
図版7	S B 31 遺物出土状況 北から／S B 35 遺物出土状況 東から	35
図版8	S B 30 C 2 P 1 柱根出土状況 東から／S B 30 C 2 P 6 柱根出土状況 東から	36
図版9	出土遺物①	37
図版10	出土遺物②	38

1. 前 言

1 松阪・多気バイパスの概要

一般国道42号松阪・多気バイパスは、現在の国道42号線の混雑緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を図り、松阪・多気地区の経済発展に寄与することを目的に、多気郡多気町仁田から松阪市古井町までの全長11.9kmについて計画されたものである。

建設計画によれば、多気郡多気町仁田から松阪市中万町までの9工区(3.1km)、同市中万町から八太町までの10工区(1.4km)、同市八太町から上川町までの11工区(5.0km)、同市上川町から古井町までの12工区(2.4km)の4工区に分けられている。なお、今回発掘調査を実施した廿子遺跡は11工区内に所在する。

事業地内における埋蔵文化財発掘調査は平成2年度から順次行われた。それらの経過および詳細については、別表に掲げたので詳細についてはそちらを参照されたい。

2 発掘調査に至る経過

松阪・多気バイパス建設事業に伴う廿子遺跡の調査は本線部分を対象として、平成7年度に行われている。(第1次調査)

この時の調査では泉道西側の水田を発掘している。その際、溝1条が確認されたが、出土した遺物は時期や種類の特定できない土器の細片ばかりであったため、溝の性格など詳しいことは判明しなかった。該当する発掘調査に係る報告書は平成8年度に刊行されており、詳細についてはそちらを参照されたい。¹⁾

しかしながら、その後、平成16年度に国土交通省紀勢国道事務所から上川町地内の廿子遺跡でバイパスに伴う地下道建設工事計画が新たに提示され、協議の結果、該当部分について範囲確認調査を行うこととなった。平成16年10月下旬に範囲確認調査を実施した結果、400㎡を対象とする本調査範囲を確定し、国土交通省紀勢国道事務所に報告した。その後も協議を重ね、平成18年4月1日付で国土交通省中

部整備局長と三重県知事との間で埋蔵文化財発掘調査にかかるとの契約を締結した。

3 調査方法

(1) 地区割り

4m方眼のグリッドを設定した。調査区がほぼ正方形であることから、調査区西壁に沿って北から南に数字を、南壁に沿って西から東へアルファベットを与え、各グリッドの名称とした。

(2) 遺構カード

グリッドごとに作成し、略図は遺構検出後掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示した。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付し、土坑・溝・堀立柱建物など遺構については遺跡全体で通し番号を付けた。

(3) 遺構略測図

遺構の検討や遺物整理等のため、遺構カードを基にした100分の1の遺構略測図を作成した。

(4) 写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として4×5インチ版フィルム(モノクロ・カラーポジ)、サブとして6×9インチ版フィルム(モノクロ・カラーポジ)・35mmフィルム(モノクロ・カラーポジ)を使用した。また、メモ写真としてデジタルカメラも必要に応じ使用した。なお、遺物写真撮影は基本的に6×7インチ版フィルム(モノクロ)を使用している。

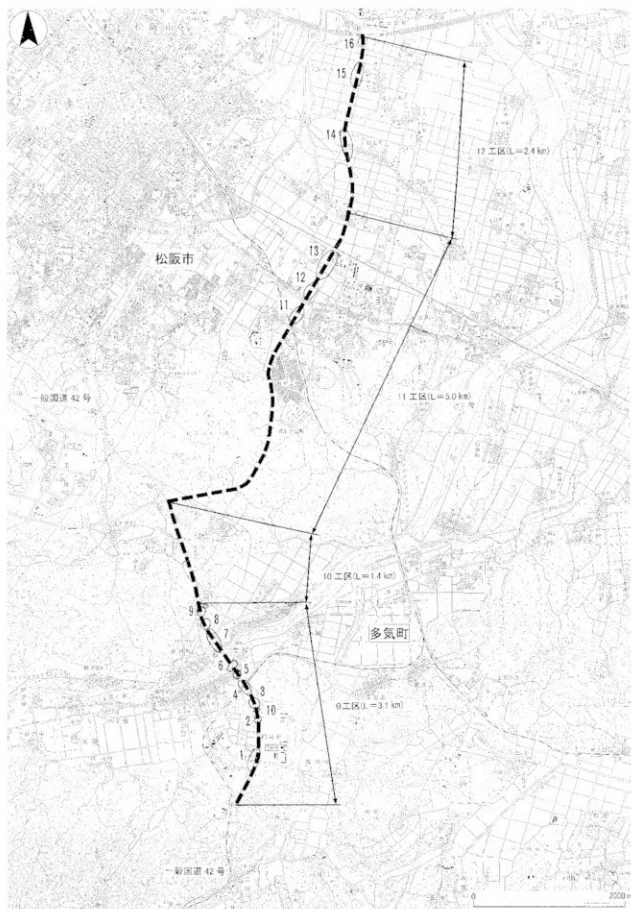
使用したカメラはウィスタSP(4×5インチ・6×9インチ)、ニコンFM2(35mm)、オリンパスμ-30・キャノンEOS kiss(デジタルカメラ)である。

(5) 遺構実測

手描き実測(20分の1)を実施した。また、遺物出土状況図等の詳細実測図は、別途手描き実測(10分の1)を行った。

(6) 文化財保護法に関する諸通知

当遺跡発掘調査に係る関係法令の諸通知は、以下の通りである。



第1図 路線・工区・遺跡位置図 1 : 50,000 (国土地理院 1 : 25,000 地形図「松阪」「国東山」を改変)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(m ²)	担当者
1	明瓦窯跡群 【田ノ畑外遺跡第1次】	多気町相可字明瓦	平成4(1992)年8月29日～9月30日(築湖確認調査) 平成4(1992)年10月18日～平成5(1993)年2月28日 平成5(1993)年4月19日～10月29日 *平成4年6月17日～6月25日 平瀬調査(磁瓦探査)	530 1,500 1,400 計 3,430	田村隆一・宇河雅之 田村隆一・宇河雅之 宇河雅之・西村修久
	2	明瓦古墳群	多気町相可字明瓦		
3	甘糟遺跡	多気町筑麻字甘糟	平成3(1991)年8月28日～10月11日(築湖確認調査)	144 計 144	田中善久雄・野原定司
	果園遺跡	多気町筑麻字果園	平成3(1991)年8月28日～10月11日(築湖確認調査) 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年1月27日 *遺跡名変更、旧遺跡名は【多気町桑並遺跡】	908 2,300 計 3,208	田中善久雄・野原定司 西村修久・東 良樹
5	上ノ畑外遺跡	多気町筑麻字上ノ畑内ほか	平成2(1990)年7月23日～9月12日(築湖確認調査) 平成5(1993)年1月28日～2月1日(築湖確認調査) 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年1月27日 平成4(1992)年4月18日～8月31日	68 98 1,950 * 112 2,050 * 64 計 5,184 * 176	河瀬信幸 田村隆一・宇河雅之 西村修久 東 良樹・下平謙弘
	根ノ世古遺跡 【田ノ畑外遺跡第2次】	多気町相可字根ノ世古	平成3(1990)年2月6日(築湖確認調査) 平成6(1994)年4月11日～5月10日	48 50 計 98	田村隆一・松本美光 松本美光・小山憲一
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成5(1993)年7月9日～7月12日(築湖確認調査) 平成6(1994)年5月23日～8月24日 平成6(1994)年2月6日(築湖確認調査) 平成6(1994)年4月11日～6月27日	98 1,100 * 333 48 500 * 114 計 1,784 * 447	宇河雅之 小浜 亨・西村修久 田村隆一・松本美光 松本美光・小山憲一
	7	瀬ノ木遺跡	松阪市村和町字瀬ノ木・水石塚・久保田 ほか	平成2(1990)年7月23日～9月12日(築湖確認調査) 平成2(1990)年10月11日～平成3(1991)年3月19日 平成3(1991)年4月23日～5月31日 平成4(1992)年5月11日～8月31日 平成5(1993)年4月19日～8月29日 平成5(1993)年8月23日～平成6(1994)年3月31日 平成6(1994)年8月23日～平成7(1995)年1月25日	272 1,500 * 850 460 3,500 * 2,321 3,600 * 400 2,200 * 1,800 1,300 計 12,832 * 5,371
8	朱中遺跡	松阪市村和町朱中	平成2(1990)年7月23日～9月12日(築湖確認調査) 平成3(1991)年6月1日～8月24日 平成2(1991)年10月14日～平成4(1992)年3月13日 平成6(1994)年8月5日～9月22日	184 2,300 2,500 * 900 400 計 5,384 * 900	河瀬信幸 田中善久雄・野原定司 田中善久雄・野原定司 東 良樹
	9	朱中古墳	松阪市村和町朱中	平成2(1990)年7月23日～9月12日(築湖確認調査) 平成5(1993)年6月25日～8月20日	98 1,000 計 1,098
10	大日山古墳群	多気町筑麻字大日山	平成6(1994)年4月7日～6月11日	600 計 600	西村修久・小浜 亨
	11	中野前遺跡 【田ノ畑外遺跡】	松阪市上川町中野前・八王手	平成6(1994)年8月28日～10月5日(築湖確認調査)	178 計 178
12	甘子遺跡 【田ノ畑外遺跡】	松阪市上川町甘子ほか	平成6(1994)年10月9日～10月15日(築湖確認調査) 平成7(1995)年6月7日～7月19日 平成16(2004)年10月18日～10月24日(築湖確認調査) 平成18(2006)年6月12日～8月29日	145 1,544 150 339 計 2,178	東 良樹 下平謙弘・小林 秀 五嶋史佳 西口剛司・木野本和之
	13	北上遺跡	松阪市上川町字北上	平成6(1994)年10月6日～10月15日(レンダ調査)	56 計 56
13	村竹コノ遺跡	松阪市上川町字村竹・コノ・甘子ほか	平成15(2003)年11月17日～12月3日(築湖確認調査-第1次調査) 平成16(2004)年7月27日～平成17(2005)年1月10日 平成17(2005)年5月9日～平成18(2006)年1月31日 平成18(2006)年6月27日～8月21日	358 2,710 2,900 793 計 6,759	竹田重二・影名 強 五嶋史佳・大村伸一 木野本和之 西口剛司・木野本和之
	12	堀町遺跡	松阪市朝田町堀町・富宮 ほか	平成5(1993)年7月19日～7月23日(築湖確認調査) 平成6(1994)年8月28日～平成7(1995)年2月20日 平成7(1995)年8月7日～平成8(1996)年1月24日 平成6(1994)年7月15日～8月19日～21日(築湖確認調査) 平成6(1994)年7月15日～平成6(1997)年1月31日 平成6(1997)年5月6日～平成6(1998)年12月10日	358 3,000 3,100 270 4,700 2,500 計 14,928
15	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成5(1993)年1月26日～27日(築湖確認調査)	224 計 224	宇河雅之
16	山ノ花遺跡	松阪市吉井町字山ノ花	平成6(1994)年10月17日～20日(築湖確認調査) 平成7(1995)年5月10日～26日	178 1,300 計 1,478	東 良樹 松本美光・西村修久

第1表 発掘調査遺跡一覧

・文化財保護法第99条第1項（三重県教育委員会教育長宛）

平成18年6月13日付 教理第149号

・文化財保護法第100条第2項（松阪警察署長宛）平成18年9月7日付 教委第12-4-7号

4 発掘調査経過

（1）平成18年度（第2次調査・室内整理業務）

隣接する村竹コノ遺跡の第4次調査との調整もあり、契約締結後も国土交通省紀勢国道事務所と三重県埋蔵文化財センターの二者で協議を重ねた。その結果、工事工程との関係で、まず甘チ遺跡の発掘調査を行い、その後引き続き村竹コノ遺跡の調査を行うということとなった。

平成18年6月12日に現地調査に着手した。調査面積は狭小であったものの、古墳時代後期から中世前期にかけての掘立柱建物等の複数の遺構及びそれらに伴う遺物を確認し、平成18年6月29日に現地調査を終了した。

最終的な調査面積は339㎡であった。現地調査終了後、出土した遺物に係る整理作業に本格的に着手した。

（2）平成19年度（報告書作成業務・刊行）

報告書作成業務のみ実施し、平成20年3月に発掘調査報告書を刊行した。

（3）調査日誌（抄）

・6月12日（月）晴れ

表土掘削開始。溝、ピット、土坑を確認。土師器片、須恵器片出土。

・6月13日（火）晴れ

表土掘削終了。溝3～4条、土坑2～3基、ピット多数、確認。土師器片、須恵器片、ザル1杯分確認。完形と見える須恵器を発見。

・6月14日（水）晴れ

調査区中央に座標とレベルをおとし、グリッドを設定。壁面土層に線を入れる。完形に近い須恵器を取り上げる。

・6月16日（金）晴れ

前日の雨で溜まった水を朝5時よりポンプで排水。検出開始。褐色の砂が溝の周辺にあり、切り合いが見にくい。ピットに並ぶものがある。

・6月19日（月）晴れ

前日の雨で検出した遺構のラインが消滅。再度検出。遺構掘削開始。ピット、土坑から土器片出土。

・6月20日（火）晴れ

遺構掘削続き。SK5からロクロ土師器碗と皿が出土。

・6月21日（水）晴れ

遺構掘削終了。

・6月22日（木）曇のち雨

調査区全景写真撮影。3mメッシュピン打ち。降雨のため、午後から作業中止。

・6月23日（金）～27日（火）

遺構実測。

・6月28日（水）晴れ

掘立柱建物の検討。SB1内のピット断ち割り。

・6月29日（木）晴れ

C2P6の柱材取り上げ。現地調査終了。

①『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 山ノ花・甘チ・北上遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）



第2図 廿子遺跡周辺の地形図・調査区位置図 1：5,000（松阪市都市計画図 1：2,500を改変）

II. 位置と歴史的環境

榑田川流域には多くの遺跡が存在しており、歴史的にも重要な地域である（第3図）。この地域の遺跡の概要については、すでに刊行されている多くの報告書で繰り返し述べられているため、^②ここでは廿チ遺跡に関連する事項を主に記述することとする。

廿チ遺跡（1）は松阪市街の南東、榑田川の左岸に形成された沖積平野に広がる水田地帯に位置する。海岸線からは約5kmほど内陸にあり、海から遺跡までの間は標高10m以下の低地である。遺跡内は西方の金剛川に向かって緩やかに傾斜している。これは松阪市の南方から伸びてきている丘陵地の西側斜面から続く微高地上に位置しているためである。

遺跡の所在する松阪市上川町の歴史は古く、承平年間成立とされる『和名類聚抄』に飯高郡神戸の記載があり、上川郡はこれを構成する六郡のうちのひとつに比定されている。^③上川は旧飯高郡と旧飯野郡の境であるため、時代により所属する郡に変遷が見られる。以下、列記すると、貞治3（1364）年の式年遷宮に向けてまとめられたとされる『神風抄』には「上河御園」の記載があり、これは飯野郡に入っている。^④『沢氏古文書』延徳2（1490）年「飯高郡飯野部条里図」には飯高郡に「上河」の文字が見える。^⑤さらに、『文禄検地帳』および近世の検地帳では「上川村」は飯高郡となっている。^⑥

また、廿チ遺跡の周辺には、条里制に基づくとみられる方格地割が現在も明瞭に確認できる。「廿チ」という小字名も坪名に由来する数詞地名と考えられる。現在、遺跡周辺に残る地割は「飯高郡条里」の方向に沿っているが、この地割の施工時期がどこまで遡るのかは特定されていない。

平成7（1995）年度の第1次調査では、県道西側の水田（今回の調査区の北、約50mの地点）を発掘している。その際、溝1条とピット数個を確認しているが、出土遺物が時期の特定できない土器の細片ばかりであったため、遺構の時代や性格などは判明していない。

廿チ遺跡に隣接する遺跡として、約200m北には村竹コノ遺跡（2）がある。平成15～18年度に行わ

れた発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大規模な環濠集落跡と中世の溝や井戸などが確認されている。

また、約200m南には北上遺跡（3）がある。平成7年度の発掘調査では、古墳時代後期の遺物を伴う、ほぼ真北に流れる河道が確認されている。これらの遺跡の調査結果と今回の廿チ遺跡の第2次調査で確認した遺構や遺物がどのような関連を持つのかについては、検討が必要である。

また、廿チ遺跡の約200m南を東西に走る参宮街道は、旧飯野郡内では方格地割の方向に一致しており、なおかつ古代の官道とも重複していると推定されている。^⑦官道は現在の駅部田町から早馬瀬町へまっすぐ延びていたと想定されているが、^⑧これまでの発掘調査ではそのことを直接示す道路遺構は確認できていない。

②『堀町遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）など。
③西山克・久松倫生・下村登良男「松阪市」『日本歴史地名体系24 三重の地名』（平凡社、1983年）

④『群書類従』第一 神祇部

⑤『松阪市史』第3巻 資料編 古代・中世（松阪市史編纂委員会、1980年）所収の巻頭カラー写真。

⑥『松阪市史』第4巻 資料編 検地帳1（松阪市史編纂委員会、1978年）

⑦「北上遺跡」「山ノ花・廿チ・北上遺跡」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

⑧ 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（上田正昭編『探訪 古代の道』第1巻 法蔵館、1988年）



第3図 遺跡位置図 1 : 25,000 (国土地理院 1 : 25,000地形図「松阪」)

III. 遺 構

調査区内で確認できた遺構は、掘立柱建物11棟、土坑11基、溝7条である。(第2図 平面図)

調査区の東側に掘立柱建物や土坑などが集中し、西側には溝が集中している。

包含層および各遺構からの出土遺物は、古墳時代後期末と平安時代後期の2時期におおむね大別できる。建物跡の規模や形式から見ても、各遺構は、この2時期に属するものと考えられる。

以下、時代別・遺構別に詳述する。なお、各遺構の記述については以下の通りである。

- ・土坑の深さは検出面からもっとも深い部分の数値を使用した。
- ・棟方向は基本的に柱間数の多い側を棟としたが、柱間が同数の場合は実寸法の長い側を棟とした。また、それも等しい場合は、便宜的に座標北に対して振れが少ない方を棟とした。
- ・溝の幅および深さは、平均的と思われる部分の数値を用いた。幅については変化の大きいものもあるので詳細は遺構平面図を参照されたい。

これ以降の記述もすべてこれに準ずる。

1 弥生時代末期の遺構

調査区内の遺構は、ほとんどが古墳時代後期末か平安時代後期のものだが、弥生時代の遺構と考えられる土坑が1基だけ見つかった。

SK3 (第4図) 長径0.9m×短径0.7mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.3mである。弥生時代末期のミガキの施された壺の体部片が出土している。

弥生時代の遺物は他に、中期のものともられる土器片(18)がSK17から出土しているのみで、他の遺構および遺物包含層からは出土していない。

2 古墳時代後期末の遺構

(1) 掘立柱建物

古墳時代後期末の建物と考えられるものは4棟である。

SB30 (第5図) 調査区北側で検出した桁行2間

×梁行2間の総柱建物である。東側のピットを建物遺構に含めれば、片側のみの独立棟持柱建物とすることもできるが断定はできない。棟方向はN64°W。柱間寸法は桁間が1.5mもしくは1.6m、梁間は1.3mもしくは1.4mである。柱穴(C2P1・C2P6)からは、柱根が2点出土している。これの樹種同定については第V章を参照されたい。土師器の破片が1点出土しているが、これだけでは時期の特定は難しい。建物の規模や形式などを考慮して、古墳時代後期末の建物とした。

SB34 (第5図) 調査区東側で検出した桁行2間以上×梁行2間の側柱建物である。東側は調査区外に延びていくため正確な規模は不明である。棟方向は一応、南北棟とした。軸方向はN35°E。柱間寸法は桁間が1.8mの等間、梁行は1.6mもしくは1.9mである。柱穴から古墳時代後期末の土師器片、須恵器片が出土している。重複する柱穴の切り合いを見ると、SB31・SB35より古い建物である。遺物だけでなく、建物の規模や方向、形式なども考慮して、古墳時代後期末の建物とした。

SB38 (第5図) 調査区南側で検出した桁行2間×梁行2間の側柱建物である。中央部分が試掘トレンチで破壊されているので、中央に柱のある総柱建物の可能性も残る。棟方向は南北棟で、軸方向はN31°E。柱間寸法は、桁間が試掘トレンチのため不明で、梁間は1.3m～1.6mとばらつきがある。柱穴からは、須恵器の杯蓋片および土師器細片が数点出土している。重複するSB38とは切り合いが明確でなく、新旧関係は不明である。建物の規模等が調査区北側のSB30に似ているので、なんらかの関連があるのかもしれない。軸方向が道跡周辺に残る飯高郡条里の地割方向に沿うが、建物の規模や形式から古墳時代後期末としたが、断定はできない。

SB39 (第5図) 調査区南側で検出した総柱建物である。中央南側部分が試掘トレンチで破壊されているが、桁行3間×梁行2間と考えた。棟方向は南北棟で、軸方向はN30°Eである。柱間寸法は、桁間が1.3m、梁間は1.6m～1.9mである。柱穴から古

墳時代後期末の土師器細片が数点出土している。重複するS B38との新旧関係は、柱穴の切り合いがはっきりせず、不明だが、時期は近いものと思われる。軸方向が遺跡周辺に残る飯高部条里の地割方向に沿うが、建物の規模や形式から古墳時代後期末としたが、断定はできない。

(2) 土坑

古墳時代後期末のものと考えられるのは5基である(第4図)。

S K10 長径1.3m×短径1.2mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.35mである。遺物は土師器の小片が1つ出土している。

S K17 長径2.2m×短径1.1mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.1mである。遺物は混入とみられる弥生時代中期の籬状紋のある土器小片が1点のほか、古墳時代後期末の須恵器甕小片、土師器甕小片が数点出土している。重複するS D15より新しい。

S K18 長径2.5m×短径0.8mの長楕円の土坑である。検出面からの深さは0.3mである。遺物は須恵器甕小片、土師器碗小片が数点出土している。重複するS K17より新しい遺構である。

S K19 長径2.3 m×短径1.5mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.25mである。遺物は古墳時代後期末の須恵器甕・蓋杯小片、土師器甕・銅小片など多数出土している。この遺構は土坑ではなく、重複する溝(S D22もしくはS D23)の肩部の崩落部分という可能性もある。

S K20 長径1.2m×短径0.6mの長楕円の土坑である。検出面からの深さは0.2mである。遺物は須恵器の杯身片が1点出土している。

(3) 溝

検出された7条の溝のうち、古墳時代後期末の溝と考えられるのは5条である。これらはすべて調査区内を南から北に流れている。調査区西側の4条の溝は調査区中央部付近でひとつの流路に重なる。重複する溝の新旧関係は、切り合いから判断すると、古い順に、S D23・S D22・S D1・S D16の順となる。しかし、どの溝から出土した遺物も時間的に大差はなく、それぞれの溝の時期に大きな隔たりは無いと思われる。これらの溝からは他の時代の遺物は、

全く出土していないため比較的短期間で埋没したものであると思われる(第4図)。

S D1 調査区西側を南北に流れる溝である。調査区内B3グリッドで他の溝と合流している。幅は0.7m、検出面からの深さは0.13mである。遺物として古墳時代後期末の土師器や須恵器の破片が多数出土している。重複する溝(S D22)の同一遺構である可能性もある。

S D15 古墳時代後期末とした溝の中で唯一、調査区東側を流れる溝である。調査区内D3グリッドでS K17に連している。幅は0.4m、検出面からの深さは0.1mである。遺物としては、土師器の甕の小片が2点出土している。切り合いから見ると、重複するS K12・S K17より古い遺構である。調査区周辺に残る飯高部条里の方向に沿って流れている点に気がなるが、切り合い関係の方を優先して時期を決定した。

S D16 はじめは北東方向へ向かうが、調査区内B4グリッドで他の溝の流路と重なる。幅は0.4m、検出面からの深さは0.1mである。遺物は、土師器や須恵器の破片が多数出土している。調査区西側の重複する溝の中では最も新しい溝であるが、遺物を見る限り時期に大きな差は感じられない。

S D22 調査区西側を南北に流れる溝である。調査区内B3グリッドで他の溝と合流している。幅は2.5m、検出面からの深さは0.13mである。遺物としては、須恵器や土師器の破片が多数出土している。重複するS D1はこの溝の上層にあたる可能性もある。

S D23 調査区西側を南北に流れる溝である。調査区内B4グリッドで他の溝が重なってくる。幅は1.2m、検出面からの深さは0.17mである。重複する溝の中では最も古い溝であるが、遺物を見る限り、時期に大きな差は感じられない。粒子の大きさが1mm程度の砂の堆積がみられることから、ある程度の水量の流れがあったことが分かる。

3 平安時代後期の遺構

(1) 掘立柱建物

平安時代後期の建物と考えられるのは7棟である。

S B31 (第6図) 調査区東側で検出した桁行4間×梁行2間の側柱建物である。棟方向は南北棟で、



第5図 古墳時代後期末 掘立柱建物 SB30・34・38・39 1:100

軸方向はN36° E。柱間寸法は桁間が1.6m～1.9mとばらつきがあり、梁間は2.0もしくは2.1mである。柱穴からは古墳時代後期末の土師器片や須恵器片が多数出土しているが、柱穴の切り合いを見ると重複するS B32・S B34より新しく、建物の規模や形式なども考慮して平安時代後期の建物とした。

S B32 (第6図) 調査区東側で検出した桁行3間×梁行2間の側柱建物である。棟方向は南北棟で、軸方向はN38°。柱間寸法は桁間が1.9m～2.9mとばらつきがあり、梁行は2.6mもしくは2.7mである。柱穴からは古墳時代後期末の土師器片や須恵器片とともに、平安時代後期の土師器鍋の体部片が出土している。建物の方向や規模から、重複するS B31と建て替えなどの関連性が考えられる。柱穴の切り合いを見ると、S B31・S B35より古い建物である。

S B33 (第6図) 調査区中央部東側で検出した桁行3間×梁行2間の側柱建物である。棟方向は南北棟で、軸方向はN38° E。柱間寸法は桁間が1.3m～1.7m、梁間は1.7mの等間である。柱穴からは古墳時代後期末の土師器の小片が多数出土しているが、建物の規模や方向、形式などを考慮して、平安時代後期の建物とした。

S B35 (第7図) 調査区東側で検出した桁行3間×梁行2間以上の総柱建物である。東側は調査区外のため正確な規模は不明である。棟方向は一応、南北棟とした。軸方向はN29° Eで、遺跡周辺に残る飯高部条里の地割方向にほぼ沿っている。柱間寸法は桁間が2.1m～2.3m、梁間は2.1mの等間である。柱穴からは古墳時代後期末の土師器や須恵器の小片と、平安時代後期とみられるクロコ土師器の椀が出土している。柱穴の切り合い関係から、重複するS B34より新しい建物であることが分かるが、S B31との新旧関係は判明しなかった。

S B36 (第6図) 調査区東側で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外のため正確な規模や形式は不明である。棟方向は一応、南北棟とした。軸方向はN30° E、柱間寸法は桁間が1.9mもしくは2.1m、梁間は1.6m以上である。柱穴からは時期・器種ともに不明の土師器細片が多数出土しているのみである。遺物からの時期特定は難しいが、建物方向などから、重複するS B37に近い時期の建物と考えら

れる。柱穴の切り合いから見ると、S B37より古い建物である。軸方向が遺跡周辺に残る飯高部条里の地割方向に合っている。

S B37 (第6図) 調査区東側で検出した側柱建物である。東側に延びていくが、調査区外になるため正確な規模は不明である。棟方向は一応、南北棟とした。軸方向はN30° E。柱間寸法は、S K13によって柱穴が削られているため、桁間は不明。梁間は2.0mもしくは2.1mである。柱穴からは時期不明の土師器細片が多数出土している。柱穴の切り合いから見ると、S B36より新しい建物である。遺跡周辺に残る飯高部条里の地割方向に沿って建てられていると見て、この時期の遺構としたが断定はできない。

S B40 (第7図) 調査区南側で検出した総柱建物である。南側に延びますが、調査区外のため正確な規模は不明である。棟方向は一応、東西棟とした。軸方向はN69° Wで、柱間は桁間が2.2m～2.7m、梁間は2.3mもしくは2.4mである。柱穴からはクロコ土師器椀の底部および無釉陶器椀(山茶椀)が出土している。

(2) 土坑

検出された11基の土坑のうち、平安時代後期のものと考えられるのは3基である(第4図)。

S K2 長径1.4m×短径1.3mのほぼ円形の土坑である。検出面からの深さは0.16mである。遺物は古墳時代後期末の須恵器や土師器の破片とともに平安時代後期の無釉陶器椀(山茶椀)が出土している。

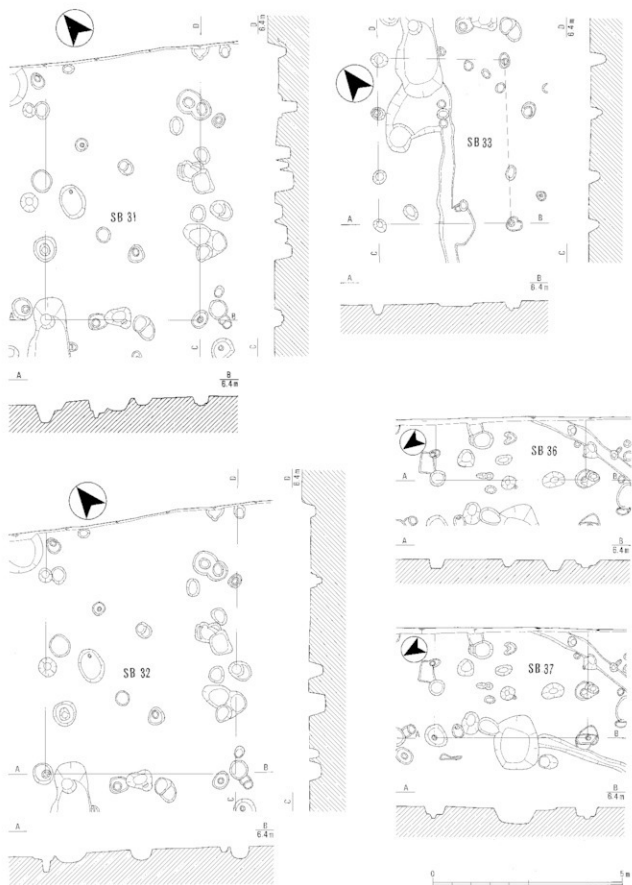
S K9 長径0.8m×短径0.7mの不定形の土坑である。検出面からの深さは0.2mである。クロコ土師器椀の底部が出土している。

S K13 長辺1.5m×短辺1.2mの長方形の土坑である。検出面からの深さは0.4mである。遺物は古墳時代後期末の須恵器片、土師器片とともに、平安時代後期の土師器細片が出土している。

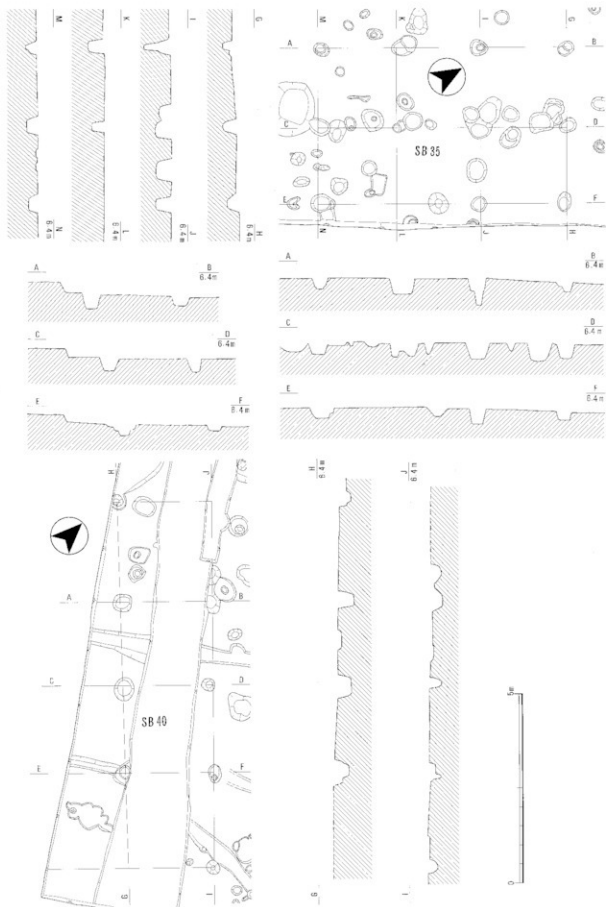
(3) 溝

平安時代後期とした溝は2条である。調査区東側を北から南に流れており、古墳時代の溝とは流れる方向が逆となる(第4図)。

S D14 幅0.4m、検出面からの深さは0.07mの溝である。途中、遺構面から消えるが、調査区内E5グ



第6図 平安時代後期 掘立柱建物① SB31・32・33・36・37 1:100



第7図 平安時代後期 掘立柱建物② SB 35・40 1 : 100

遺構番号	図版番号	地区	建物形式	規模				柱間		棟方向	軸方向	時期
				間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)	桁行(m)	梁行(m)			
SB11欠番 SB30:本邦変遷												
SB30	3	C2	廊柱	2×2	3.1	2.7	8.37	1.5+1.6	1.3+1.4	東西	N 64° W	古墳末
SB31	4	D1~D3 E1~E3	側柱	4×2	7.2	4.1	29.52	1.6+1.9+1.9+1.8	2.0+2.1	南北	N 36° E	平安末
SB32	4	D1~D3 E1~E3	側柱	3×2	7.0	5.3	37.1	1.9+2.3+2.8	2.7+2.6	南北	N 38° E	平安末
SB33	4	D3, D4 E3, E4	側柱	3×2	4.4	3.4	14.96	1.4+1.7+1.3	1.7+1.7	南北	N 38° E	平安末
SB34	3	E1, E2 F1, F2	側柱	2×2	3.6	3.2	11.52	1.8	1.6	南北	N 35° E	古墳末
SB35	5	E2, E3 F2, F3	廊柱	3以上×3	6.6	4.2以上	27.72以上	2.1	2.3+2.2+2.1	南北	N 29° E	平安末
SB36	4	F3, F4	側柱	2×1以上	4.0	不明	不明	1.9+2.1	不明	南北	N 30° E	平安末
SB37	4	E3, E4 F3, F4	側柱	2×2以上	4.1	2.0以上	8.2以上	不明	2.0	南北	N 30° E	平安末
SB38	3	C5, D5	不明	2×2	3.0	2.8	8.4	不明	1.5+1.3	南北	N 31° E	古墳末
SB39	3	C5, D5	廊柱	3×2	3.5	3.5	12.25	1.3	1.6+1.9	南北	N 30° E	古墳末
SB40	5	C5~F5	廊柱	4×2以上	9.8	2.4以上	23.52以上	2.7+2.2+2.5+2.4	2.4	東西	N 69° W	平安末

第3表 堀立建物一覧表

遺構番号	地区	規模			形状	時期	遺物	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)				
SK2	D1	1.4	1.3	0.16	円形	平安末	山茶権、土師器片、須恵器片	
SK3	D2	0.9	0.7	0.3	楕円形	弥生末	土師器壺体部片	ミガキあり
SK4欠番	E2							E2P16に変更、SB31の柱穴。
SK5欠番	E2							E2P13・14・15に変更
SK6	F4	0.6	0.4	0.23	楕円形	不明	土師器細片4つ	
SK7欠番	E2							E2P17に変更、SB34の柱穴。
SK8欠番	F3							F3P11に変更、SB35の柱穴。
SK9	E5	0.8	0.7	0.2	台形	平安末	ロクロ土師椀底部片	
SK10	C3	1.3	1.2	0.35	楕円形	古墳末	土師器小片ハケメあり	
SK12	D4	1.1	0.8	0.1	楕円形	不明	土師器小片2つ	SD15→SK12
SK13	E4	1.5	1.2	0.4	長方形	平安末	須恵器片、土師器小皿片	SD24→SK13
SK17	D3	2.2	1.1	0.1	楕円形	古墳末	弥生土器片兼灰粒、須恵器片、土師器片	SD15→SK17 SK17→SK18
SK18	D3	2.5	0.8	0.3	長楕円	古墳末	土師器片、須恵器片	SK17→SK18
SK19	B4	2.3	1.5	0.25	楕円形	古墳末	土師器片、須恵器片	SD22又はSD23と同一遺構の可能性あり
SK20	C5	1.2	0.6	0.2	長楕円	古墳末	須恵器杯身片	
SD21欠番	B4							SD22と同一遺構

第4表 土坑一覧表

遺構番号	地区	規模			流れの方向	軸方向	時期	遺物	備考
		平均幅(m)	確認長(m)	深さ(m)					
SD1	C4	0.7	11.7	0.13	南→北	N 5° E	古墳末	土師器片、須恵器片	SD22の上層の可能性あり
SD14	F4	0.4	8.1	0.07	北→南	N 66° E	平安末	土師器小皿片	
SD15	D4~D6	0.4	8.8	0.1	南→北	N 32° E	古墳末	土師器罌片	
SD16	B4, B5 A5, A6	0.4	18.2	0.1	南→北	N 45° E N 30° E	古墳末	土師器片、須恵器片	SD23→SD22→SD1→SD16
SD22	C4, C5	2.5	10.7	0.13	南→北	N 5° E	古墳末	土師器片、須恵器片	
SD23	B1~B6	1.2	7.9	0.17	南→北	N 30° E	古墳末	土師器片、須恵器片	SD23→SD22→SD1→SD16
SD24	E4	0.3	3.3	0.05	北→南	N 50° E	平安末	なし	SD14に合流する可能性あり

第5表 溝一覧表

リッドで再び現れる。遺物として土師器皿の破片が出土している。

SD24 幅0.3m、検出面からの深さは0.05mの溝である。北から南に流れている。SK13から始まり、3mほどで遺構面から消える。切り合いを見るとSK13より古いことが分かる。遺物が出土していないため時期の決定は難しいが、流れる方向とSD14の南端に合流する可能性から、この時代のものと考えた。

4 時期不明の遺構

IV. 遺物

今回の調査では包含層および各遺構から遺物整理箱（幅35cm×奥55cm×高15cm）にして10箱程度の遺物が出土した。遺物の時期は前述したとおり、古墳時代と平安時代の2時期に大別できる。それ以外の時期の遺物は、弥生時代の土器片が2点出土しているのみである。以下、時代別・遺構別に主な遺物の概略を述べる。なお、須恵器については須恵器は田辺昭三氏の編年⁸、山茶碗については藤澤良祐氏の編年⁹により記述する。また、詳細については遺物一覧表を参照されたい。

1 古墳時代後期末の遺構出土遺物

SB38 出土遺物（1）

1は須恵器杯身。TK10～TK43に並行するものと思われる。

SD1 出土遺物（2～4）

2は須恵器杯身。TK43に並行するものである。立ちあがり部分は粘土を貼り付けずに受部と一体で作る、「折り込み」と呼ばれる技法が用いられている。3は須恵器壺。頸部より上を欠くが体部は完存している。出土時、壺の中には遺物周辺のものと同じ土が詰まっていた。4は土師器甕。内外面ともに風化しており、外面にろうじてハケメの一部が確認できるのみである。時期の特定は難しいが、伴伴の須

該当するものに土坑2基がある。

SK6 長径0.6m×短径0.4m楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.23mを測る。遺物は時期不明の土師器細片が4点出土しているのみであり、他の遺構との切りあい関係もなく、時期の決定は困難である。

SK12 長径1.1m×短径0.8mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.1mを測る。遺物は時期不明の土師器細片が2点出土している。切り合いを見るとSD15より新しいが、時期の決定は困難である。

恵器に近い時期のものと思われる。

SD15 出土遺物（5～7）

5は須恵器甕の口縁部。端部を丸く巻き込んでいる。古墳時代後期末のものと思われる。6・7は土師器の甕である。6は小片のため正確な口径の復元はできなかったが、少なくとも30cm以上の口径になる比較的大型の甕である。

SD16 出土遺物（8・9）

8は土師器の甕である。この遺構から出土している多数の須恵器片と同じ古墳時代後期末に近い時期のものと思われる。9は須恵器の鉢の口縁部と思われる。反り返らず直線的に作られている。外面にヘラによる沈線が縦に1条、確認できる。平安時代の遺物とする見方もできるが、同遺構からは古墳時代後期末の須恵器片や土師器片が200点ほど出土しており、仮に9が平安時代の遺物であったとしても、遺構自体の時期は動かないものと考えられる。

SD22 出土遺物（10～16）

10は須恵器杯蓋。TK43に並行するものである。11は須恵器杯身。TK209に並行するものである。12・13は土師器碗。どちらも、粘土の接合痕がみられる。この2点は、大きさ・胎土・色調などが非常に類似しており、同一個体の可能性が高いが、破片に隣接する部分がなく、また、3mほど離れて出土

しているので別遺物とした。14～16は土師器の甕である。共に出土した須恵器や土師器碗と近い時期のものと思われる。

S K 17 出土遺物 (17・18)

17は混じり込みとみられる弥生土器壺の体部片。籾状紋と沈線4条が施されている。弥生時代中期のものと思われる。18は須恵器杯身。T K 10～T K 43に並行するもの。

S K 19 出土遺物 (19～22)

19・20は須恵器の杯蓋である。どちらもT K 43に並行するもの。ただし20は比較的小型でロクロケズリの調整が省かれていることなどから、T K 209まで下る可能性もある。21は須恵器の高杯の脚部である。全体に歪みが大きい個体であったが、図は修正して作成してある。22は土師器の甕。風化が進み、調整痕は内面にハケメが一部残るのみである。

2 平安時代後期の遺構出土遺物

S B 35 出土遺物 (23～26)

23は無釉陶器碗(山茶碗)。高台は比較的高く、初段痕はみられない。体部は丸みが強い。口縁部はゆるやかに外反し、輪花が施されている。胎土もきめ細かく粘りのあるものを使用しており、山茶碗としては比較的上質な仕上げとなっている。全体の形などから第3型式にあたるものである。24はロクロ土師器の碗である。高台が丁寧に作られており、体部の丸みも強くでている。25はロクロ土師器小皿。完形で出土しているが、内外面ともに風化が著しい。底部の糸切り痕が確認できる。24・25はともに平安時代後期のものとみられる。26は砥石。頁岩製とみられるが、流紋岩の可能性も残る。きめが細かく、仕上げに用いたものであろう。

S B 40 出土遺物 (27～29)

27はロクロ土師器の皿で、底部の糸切り痕が明瞭に確認できる。28はロクロ土師器碗の底部である。外面にススの付着がみられ、内面には炭化した有機物がわずかであるが確認できる。29は土師器の甕である。口縁端部を内側に丸く巻き込んでいる。

ビット出土遺物 (30・31)

30はロクロ土師器の皿の底部と思われる。風化が著しく、調整痕はほとんど摩滅しており、器種の判

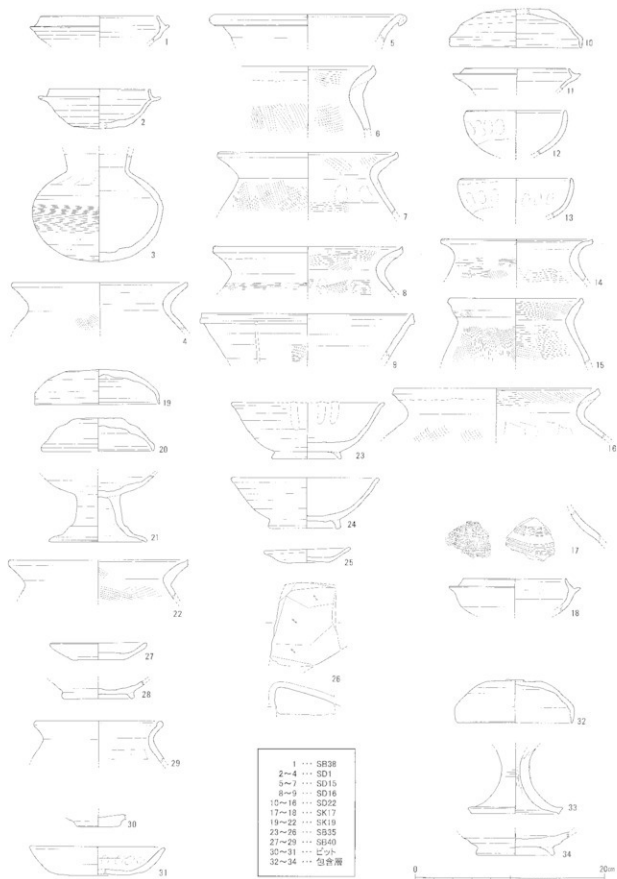
定が難しいのであるが、糸切り痕とロクロナデのような痕跡がわずかにみられること、また、器壁が比較的薄いことから、ロクロ土師器の皿とした。しかし、高台部の断面には高台の貼付痕のようなものもみられ、小型の甕の可能性も捨て切れない。31は土師器の皿である。オサエの指頭瓦痕と口縁部にヨコナデの調整がみえる。

3 包含層出土遺物 (32～34)

32は須恵器の高杯蓋である。頭頂部の突起は、ヘラ切り痕のようにも見えるが、貼付痕が確認できるのでツマミと考える。口径が比較的小型化していることから、T K 209に並行するものと思われる。33は須恵器の高杯脚部。中央部に沈線2条が入り、自然釉も確認できる。やはり古墳時代後期末のものである。34は無釉陶器碗(山茶碗)。23に比べ、胎土に若干の荒さはあるものの、高台部は同じく丁寧な仕上げりである。第4型式のものである。

⑨以下、須恵器は田辺昭三氏の編年により記述する。田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1981年)。

⑩以下、山茶碗は藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター、1994年)。



第8図 甘子遺跡出土遺物 1 : 4

報告番号	RNo.	種別 器種	クワ 遺構名	調査時 遺構名	計測値 (cm)	積存量	調整・技法などの特徴	粘土	構成	色調	特記事項
1	001-08	須恵器 杯身	C5 SB38	CS2	口径12.2	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”	密 (~1mm砂粒少)	良	内外・灰白N7/	
2	001-04	須恵器 杯身	B3 SD1	同	口径10.6	口縁部 3/12	外・小切後付”、DP2H”9、DP2H” 内・DP2H”	密 (~2mm砂粒有)	良	内外・灰白N6/	
3	002-01	須恵器 臺	B3 SD1	同	体部径 14.0	体部 寛存	外・DP2H”、貼付付”、沈線1条、斜 方、DP2H”9、内・DP2H”	密	良	内外・青灰SB5/1	斜方本/底
4	004-05	土師器 臺	B3 SD1	同	口径18.2	口縁部 3/12	外・32H”、後DP2 内・32H”、後DP2”	密	-	内外・浅黄緑10YR8/4	風化著しい
5	002-09	須恵器 臺	B4 SD15	同	口径19.4	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”	やや密 (~2mm砂粒多)	良	内外・明黄灰SB7/1~暗青灰 SB3/1	
6	004-03	土師器 臺	B4 SD15	同	-	口縁部 小片	外・32H”、後DP2 内・32H”、後DP2”、斜後DP2”	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/3	
7	002-08	土師器 臺	B4 SD15	同	口径19.2	口縁部 3/12	外・32H”、DP2 内・32H”、DP2”、斜後DP2”	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/4	DP25本/底
8	003-01	土師器 臺	B5 SD16	同	口径20.0	口縁部 2/12	外・32H”、DP2 内・32H”、DP2”、斜後DP2”	密	-	内外・淡黄2.5Y/3	
9	002-03	須恵器 鉢	B3 SD16	同	口径22.0	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”	密	良	外・横線灰SB7/1 内・緑灰10G6/1	
10	001-07	須恵器 杯蓋	C4 SD22	同	口径13.5 器高4.1	口縁部 寛存	外・小切後付”、DP2H”9、DP2H” 一方方向付”、内・DP2H”	密 (~1mm砂粒少)	良	外・赤灰SB5/1~青黄灰 SB7/1	ゆがみ有
11	001-02	須恵器 杯身	B4 SD22	SZ1	口径11.0	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”	密 (~1mm砂粒少)	良	外・明黄灰SB7/1 内・青灰SB6/1	欠け多い
12	004-01	土師器 瓶	B4 SD22	SZ1	口径10.3	口縁部 2/12	内外・斜後DP2H” 複合有	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/3	11と同一個体の 可能性有
13	004-02	土師器 瓶	B3 SD22	同	口径11.6	口縁部 1/12	内外・斜後DP2H” 複合有	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/3	12と同一個体の 可能性有
14	002-06	土師器 臺	B4 SD22	同	口径16.0	口縁部 3/12	外・32H”、横方向DP2”、縦方向DP2” 内・32H”、DP2”	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/4	DP26本/底
15	003-02	土師器 臺	B4 SD22	SZ1	口径14.0	口縁部 3/13	外・32H”、DP2 内・32H”、DP2”	密	-	内外・にぶい暗5YR7/4 (内部は黒褐色)	DP25本/底
16	003-06	土師器 臺	B3 SD22	同	口径22.0	口縁部 6/12	外・32H”、DP2 内・32H”、DP2”、斜後DP2”	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/4	風化著しい
17	003-09	弥生土器 臺	D3 SK17	同	-	体部 小片	外・付”、篋状紋、付”、沈線4条、ナ 子”、内・付”、斜後	やや密	-	内外・浅黄2.5Y/3	
18	001-01	須恵器 杯身	D3 SK17	同	口径10.8	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”	密 (~0.5mm砂粒少)	良	外・灰白N6/ 内・灰白N7/	
19	001-06	須恵器 杯蓋	B4 SK19	同	口径14.2 器高3.4	口縁部 6/12	外・小切後付”、DP2H”9、DP2H” 内・DP2H”	密 (~0.5mm砂粒少)	良	外・赤灰SB5/1~青黄灰SB2/1 内・黒灰N7/	ゆがみ有
20	001-02	須恵器 杯蓋	B4 SK19	同	口径11.6 器高3.5	口縁部 1/12	外・小切後付”、DP2H”、不定向ナ 子”、内・DP2H”	密	良	内外・青白SP6/1	横線有
21	002-02	須恵器 高林	B4 SK19	同	高台10.4	高台部 6/12	外・DP2H”、貼付付”、DP2H” 内・DP2H”	密	良	外・青灰SB6/1 内・明黄灰SB7/1	ゆがみ有
22	003-07	土師器 臺	B4 SK19	同	口径18.8	口縁部 3/12	外・32H” 内・32H”、DP2”、斜後DP2”	やや密 (~3mm砂粒多)	-	内外・にぶい黄緑10YR7/4	
23	002-07	無釉陶器 瓶	E3 SB35	E3P7	口径16.0 高台7.4	高台部 8/12	外・DP2H”、貼付高台後付”、糸切痕 内・DP2H”	密	良	内外・灰白N7/	輪花有
24	003-03	弥生土師器 瓶	E2 SB35	E2P15	口径15.3 器高5.3	口縁部 6/12	外・DP2H”、貼付高台後付”、糸切痕 内・DP2H”	やや密 (~3mm砂粒有)	-	内外・浅黄緑10YR8/3	内面の風化著 しい
25	002-05	弥生土師器 小品	E2 SB35	E2P15	口径7.7	寛存	外・斜後付”、DP2H”、糸切痕 内・DP2H”	やや密 (~2mm砂粒多)	-	内外・灰白2.5Y/2	風化著しい
26	004-06	石製品 磁石	E2 SB35	E2P15	最大径10.2 最大径2.5	欠け有	摺面	頁岩	-	素灰白5Y8/1~黄緑10YR8/5 が黒点状に入る 素灰白5Y8/1~青灰10G6/1	流紋岩の 可能性有
27	002-10	弥生土師器 皿	E5 SB40	ESP3	口径10.2	口縁部 3/12	外・DP2H”、糸切痕後付” 内・DP2H”	密	-	内外・灰白10YR8/2	
28	003-05	弥生土師器 瓶	E5 SB40	ESP1	高台7.1	高台部 寛存	外・DP2H”、貼付高台後付”、糸切痕 内・DP2H”	密	-	内外・にぶい黄緑10YR7/4	
29	004-04	土師器 臺	E5 SB40	ESP3	口径13.0	口縁部 3/12	外・32H” 内・32H”、斜後DP2”	やや密	-	内外・浅黄緑10YR8/3~黒灰 10YR3/2	風化著しい 保存差
30	003-08	土師器 弥生土師器 皿	D3P3	同	底部 径4.7	底部 寛存	内外・DP2H”付”、高台貼付後付”	やや密 (~2mm砂粒多)	-	外・暗5YR7/6~浅黄緑10YR8/3 内・にぶい黄緑10YR7/2	風化著しい
31	003-04	土師器 瓶	D1P1	同	口径14.3 器高3.1	口縁部 10/12	外・斜後DP2H”、斜後DP2H”後工具付” 内・斜後DP2H”、斜後	やや密 (~3mm砂粒多)	-	内外・淡黄2.5Y/4	
32	001-05	須恵器 杯蓋	C4 包舎庫	同	口径12.0 器高4.5	口縁部 1/12	外・小切後付”、DP2H”9、DP2H” 一方方向付”、内・DP2H”	密 (~0.5mm砂粒少)	良	内外・青灰SB6/1	
33	001-09	須恵器 高林	包舎庫	同	器部径 10.0	口縁部 1/12	外・DP2H” 内・DP2H”、ナ子”	密 (~0.5mm砂粒少)	良	内外・青灰SB6/1	沈線2条 自然磨
34	002-04	無釉陶器 瓶	包舎庫	同	高台8.2	高台部 3/12	外・DP2H”、貼付高台後付”、糸切痕 内・DP2H”	密	良	内外・灰白N7/	

第6表 遺物観察表

V. 廿チ遺跡出土柱根の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ 植田 弥生

1 はじめに

ここでは、C2区から出土した掘立柱建物跡の柱根2点の樹種同定結果を報告する。

当遺跡から北へ約200mの地点には、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に営まれた大規模な集落跡がある。当遺跡はそれより後の古墳時代後期以降の遺構・遺物が多く、樹種同定の柱根2点は古墳時代後期である。

2 試料と方法

材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、各方向の薄い切片を片刃の剃刀を用いて剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

3 結果

C2区の掘立柱建物跡から出土した柱根2点は、Pit6が落葉広葉樹のクリ、Pit1が常緑広葉樹のシャシャンボであった。Pit6のクリは、直径約16cmで樹皮付きの状態での利用した芯持ち丸木の形状であった。Pit1のシャシャンボは、分割材または一部が残存したものであり、樹皮は無い。横断面のサイズは、放射径8cm、接線径10.5cmであることから、推定直径は放射径の倍に近い20cm前後の太さの材であったと推定される。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

ブナ科 第7図 1a-1c (Pit6)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

(2)シャシャンボ *Vaccinium burcaetatum* Thunb.

ツツジ科 第7図 2a-2c (Pit1)

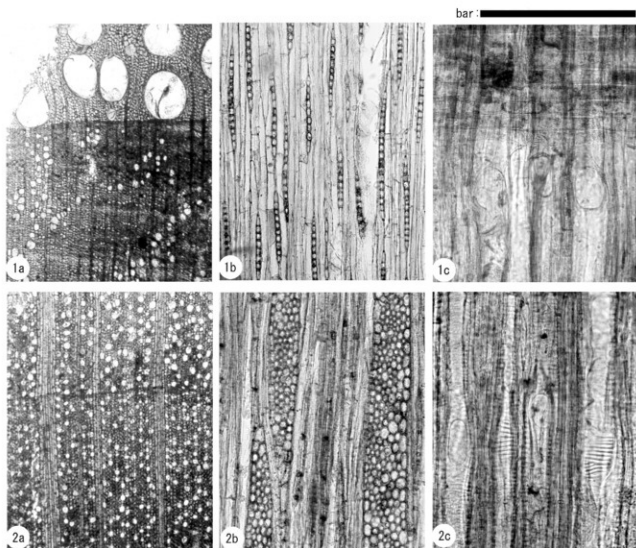
極めて小型で角形の管孔が密在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と横棒数の少ない階段穿孔があり、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～7細胞幅、単列のものは極めて大型の直立細胞からなり、多列部は平伏細胞と方形細胞が入り混じり上下端に直立細胞が単列で1～3層あり、縁辺部に直立細胞がある。直立細胞の外形はふっくらして大きく背も高い。

4 考察

古墳後期の柱根2点は、クリとシャシャンボの広葉樹材であった。当遺跡から北へ200mの地点には、弥生時代後期末から古墳時代前期の南勢地域最大級の集落が営まれていた村竹コノ遺跡がある。村竹コノ遺跡の調査では、古墳前期の柱材には針葉樹や落葉および常緑広葉樹のそれぞれ複数の種類が利用されていた（県に報告中）。当遺跡から出土した柱2点うちクリは村竹コノ遺跡でも柱から検出されており、シャシャンボは垂木?から検出されている。従って、当遺跡の試料は古墳後期の2点であるが、村竹コノ遺跡で調査された古墳前期の建築材樹種利用と類似性があることが判った。

遺構	地区	器種	樹種	形状	備考
SB30	C2 Pit6	柱根	クリ	樹皮付 芯持ち丸	直径約16cm
	C2 Pit1	柱根	シャシャンボ	分割?	推定直径20cm前後

第7表 廿チ遺跡出土柱根の樹種同定結果一覧



第9図 甘子遺跡出土柱根材組織の光学顕微鏡写真

1 a-1 c : クリ (C2区Pit 6)

2 a-2 c : シャシャンボ (C2区Pit 1)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

bar : a=1.0mm b=0.4mm c=0.2mm

VI. 結 語

1 遺構の変遷について

廿チ遺跡の今回の調査で検出した最も古い遺構は弥生時代末期の土坑（SK3）である（第11図）。しかし、弥生時代の遺構はこの土坑1基のみであり、遺物も調査区全体で土器小片が2点しか出土していない。隣接する村竹コノ遺跡に大規模な環濠集落があった時代には、この調査区内においては人の暮らしはさほどなかったと考えられる。

この地に人の手がまとまって加えられるようになるのは、村竹コノの環濠集落が廃絶してから300年ほど経過した古墳時代後期末になってからである。この時代の遺構として、掘立柱建物4棟・土坑5基・溝5条を検出した。溝から出土した須恵器などをみると、比較的短期間（田辺編年TK10～TK209に収まる範囲）で溝は機能しなくなったことが分かる。また、次の時代の遺物が連続して出てこないことから、周辺の建物も溝と同じころに使用されなくなったものと考えられる。平成7年（1995）年の北上遺跡の範囲確認調査では、ほぼ真北に流れる河道が検出されており、これが真盛川の旧河道であろうと推定されている。¹¹ 今回、廿チ遺跡で検出した北東方向に流れる溝の重なり（古い順にSD23・SD22・SD1・SD16）は、出土遺物や規模・方向からみて、北上遺跡で確認された旧真盛川から引かれてきた水路であると考えられる。

なお、SB30の柱穴から出土した柱根は樹種同定の結果、クリとシャシヤンボであることがわかった。クリ材は村竹コノ遺跡の古墳時代前期の遺構からも出土しており、この地では古墳時代を通じて利用される樹木であったようである。また、同じく植生もこの時代はさほど変化がなかったことが伺える。

古墳時代以降、しばらくのあいだ人間の活動の痕跡が調査区内から消えてしまうが、平安時代後期になると、人びとはふたたびこの地での生活を再開している。この時代の遺構として、掘立柱建物7棟・土坑3基・溝2条がある。比較的大きな総柱の建物複数建てられていることや日常雑器である山茶碗

やロクロ土師器などが出土していることなどから、数家族がここで暮らしていた可能性が見えてくる。しかし、出土している山茶碗が藤澤編年の第3型式～第4型式に限られることなどから、その暮らしはせいぜい1代か2代程度の短期間で終わったようである。その後、ここに人は住まなくなり、水田として利用され今日に至ったと考えられる。また、この時代の建物が調査区東側に偏っていることから、この集落の中心は調査区外の東方にあったとみられる。隣接する村竹コノ遺跡では、検出された溝や井戸などから第3型式～第7型式までの山茶碗が出土している。平安時代後期には両遺跡の集落は併存しており、その後、廿チの住居群が廃絶した後も村竹コノの集落は存続していたことが分かる。また、距離的にみて、廿チ遺跡と村竹コノ遺跡の集落が同一の集落であった可能性もある。

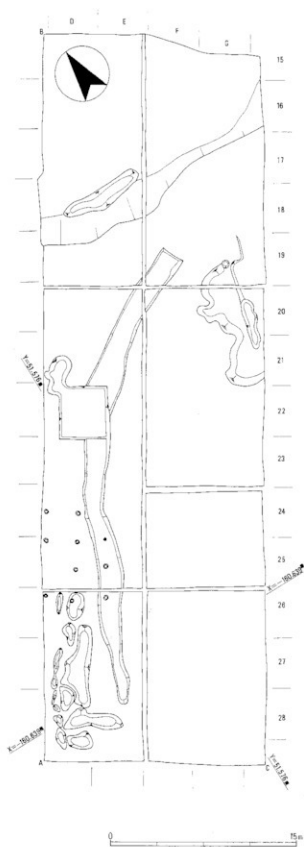
2 小字名「廿チ」と飯高郡条里の坪並について

廿チ遺跡周辺では条里地割に基づくとみられる方格地割が広範囲にわたって確認できる。「廿チ」という地名（小字名）が条里制における坪名である可能性は高い。今回試みに明治22年ごろに作られたという小字名の入った地図¹²と昭和20年代に米軍が撮影した航空写真を使って、遺跡周辺の小字名と坪割を再確認したところ、「廿チ」の西隣に「七ノ坪」、東隣に「九先」という小字名が確認できた。これらをもとに坪並を復元してみると、南西隅から始まる千鳥式であることが分かった（第12図）。すなわち「廿チ」はやはり20坪であり、「七ノ坪」「九先」はそれぞれ17坪・29坪の変化したものと推定される。さらに追っていくと、この坪並は廿チから南に1条、西に2里離れた位置にある「四ノ坪」「五ノ坪」という小字名の並びとも矛盾なく合致する。飯高郡条里の坪並は、すでに谷岡武雄氏¹³や倉田康夫氏¹⁴が復元しており、今回の作業はそれを追認する結果となる。しかし、今なお飯高郡全体の条里プランは復元されておらず、今後の課題となっている。

3 棟方向と条里方向の関係について

廿子遺跡は飯高郡と飯野郡の境に位置する。郡境は自然や社会の変化など、様々な要因で移動することがある。そのことは第Ⅱ章「位置と歴史的環境」で挙げた文献資料からも推察できる。これを考古学的にみても、今回の調査で検出された掘立柱建物全11棟のうち、飯高郡条里の方向（ $N 30^{\circ} E$ ）に合うもの（ $\pm 1^{\circ}$ 以内）は5棟（SB35・SB36・SB37・SB38・SB39）存在する。の中には古墳時代の建物としたものもあり（SB38・SB39）、すべてが条里方向を意識したものとは言えないが、飯野郡条里の方向（ $N 15^{\circ} E$ ）に合うものは11棟中、ひとつもみられない。このことから少なくとも平安時代後期のある時期においては、この調査区周辺は飯高郡条里の影響下にあったといえることができる。

なお、平成7年（1995）年の廿子遺跡の第1次調査では、県道西側の調査区から、掘立柱建物跡（1棟）ともみえるピット群が検出されている（第10図）。前掲報告書では、埋土などの状況から劇場整備以降のものである可能性が指摘され、掘立柱建物の跡とはみなされていない。試みにこの柱列の軸方向を計測したところ、 $N 38^{\circ} E$ であった。これは今回の第2次調査で確認された平安時代後期の掘立柱建物（SB32とSB33）の棟方向に合致する。このことから、第1次調査時のピット群は同時期の掘立柱建物跡である可能性も考えられる。しかし、この $N38^{\circ} E$ という棟方向は飯高郡条里（ $N30^{\circ} E$ ）とも飯野郡条里（ $N 15^{\circ} E$ ）とも合わない。この第3の方向（ $N38^{\circ} E$ ）が周辺一帯にどの程度の影響力があつたのか、また、周辺に残る飯高郡および飯野郡条里とどのように関係するのかについては、これまでの調査範囲に限られていることもあり、今後の調査の成果を待ちたい。



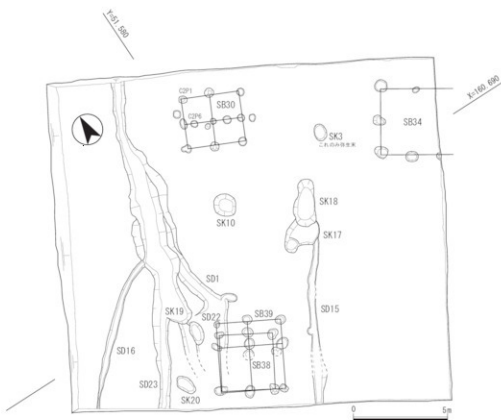
第10図 廿子遺跡（第1次）遺構平面図1：300

①「北上遺跡」『山ノ花・廿子・北上遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）

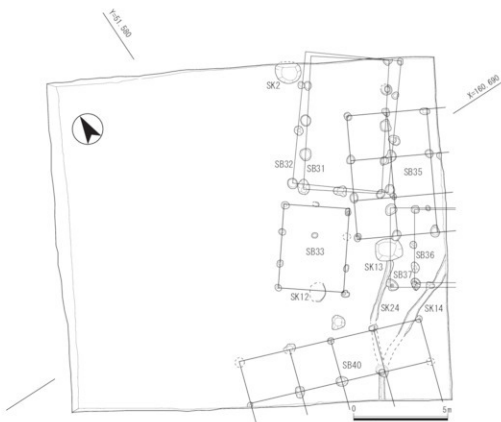
②「飯高郡神戸村同花岡村大字駅部田字図」『松阪市史』第4巻 史料編 検地帳1（松阪市、1978年）の付図。

③谷岡武雄「柳田川中・下流域の条里」（藤岡謙二郎編『河谷の歴史地理』 蘭書房、1958年）

④森田康夫「条里制と在園」（東京堂出版、1976年）



I 古墳時代後期



II 平安時代後期

第11図 遺構変遷図 1 : 200



第12図 廿子遺跡周辺坪並復元図 (米軍撮影航空写真より作成のためみずみあり)

写真図版



発掘調査終了後の甘子遺跡（北上空から撮影）手前は村竹コノ遺跡第4次調査区 2006年8月14日撮影



調査前全景（東から）



工事完成後全景（東から）



表土掘削（西から）



作業風景（東から）



S D23 検出作業 (北から)



S B30 柱穴検出状況 (北から)



調査区全景（東から）



掘立柱建物 S B30（東から）



柱穴検出状況（真上から）



堀立柱建物（SB30～36）集中部分（東から）



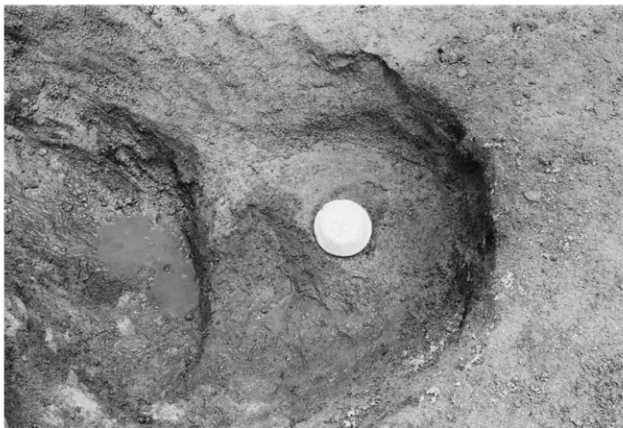
溝 SD1・16・22・23 (南から)



溝 SD23と南壁土層



S B31 遺物出土状況（北から）



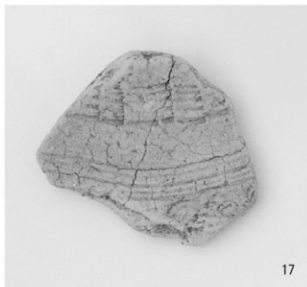
S B35 遺物出土状況（東から）



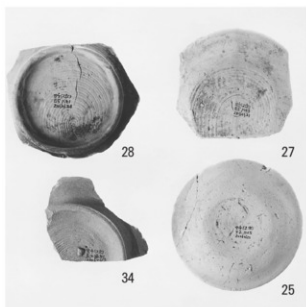
SB30 C2P1 柱根出土状況（東から）



SB30 C2P6 柱根出土状況（東から）



出土遺物①



出土遺物 ②

報 告 書 抄 録

ふりがな	はたちいせきだいにじはくつちょうさほうこくしよ							
書名	廿チ遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	123-8							
編著者名	勝山孝文							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地							
発行年月日	2008年(平成20年)3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡番号					
はたちいせき 廿チ遺跡 (第2次)	三重県松阪市上川町 <small>うまがわちう</small>	204	8a-26	34° 33' 02"	136° 33' 02"	2006年 6月12日 ? 2006年 6月29日	339	一般国道42号 松阪多気バイ パス建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
廿チ遺跡	集落跡	古墳 中世	溝 ビット 土坑 掘立柱建物		須恵器 土師器 陶器			
要約	第1次調査区の南東に位置する部分、およそ300㎡を発掘調査。古墳時代後期から中世にかけての掘立柱建物、溝、土坑、柱穴などの遺構のほか、小規模な流路跡を確認した。遺構の状況から、集落の東端部分に相当すると考えられる。第1次調査成果もあわせて検討すると、集落の規模はそれほど大きくないと考えられる。調査区のすぐ南側には古代伊勢道のルートが想定されており、それとの関係が興味深い。							

一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ

廿 十 遺 跡

第2次発掘調査報告

2008年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 東海印刷株式会社
